

# AsiaWave

 vol.167

**1 トルコ写真館**

平早 勉

アブドゥラー・ギュル大統領の来日

**7 特集 ネパール**

## ロルパ取材記

マガラート自治区人民政府議長  
サントス・ブラ・マガルとの再会を求めて

小倉清子

Life&Culture **14**

中国 五輪前に国内の紛争が激化  
ゆったりした流れ  
村田広幸  
中川昌俊  
映画『ファン・シニ 映画版』  
『ミツナ・マドンナ』  
本 『100%香港製造』  
『100%香港製造』  
アジア奈みづほ  
おやめへし雨季  
ラフマン・愛



在日トルコの子どもたち (平早勉撮影)

トルコ写真館 アブドゥラー・ギュル大統領の来日

平早勉

2010年にトルコでは「日本年」が開催される。非常に親的な土地柄で知られるトルコ。6月にはトルコの国家元首として初めてアブドゥラー・ギュル大統領が日本を公式訪問した。「イスラエルシリア間の和平交渉の仲介役を勤める」(読売)など外交畑に明るい大統領は、2010年の日本年に「天皇、皇后両陛下をトルコに招請したい」(同紙)との希望を胸に、6月4日より8日まで日本に滞在、両国の友好親善を深めた。

日本とトルコの友好の礎は、1890年のエルトゥールル号遭難事故。明治大帝を表敬訪問したオスマン・トルコ初の使節団を乗せた軍艦が和歌山県串本町沖で遭難。沿岸漁民達の懸命の救助で多くのトルコ人の命が助かったことに感動、感激したトルコ側は、最近でもトルコの小学生の教科書に紹介しており、子どもたちも日本に親近感を抱いている。(詳細は、本誌05年12月号にレポート)トルコの日本への恩返しのひとつとして有名なのが、1985年の日本人救出劇。イラン・イラク戦争の最中、イランの首都テヘランに取り残された日本人を脱出させる為に、救援機を送ったのがトルコ。恩義に厚い西アジアの友好国である。(次頁へ続く)

# 平早勉の トルコ写真館



トルコ舞踊団の公演を楽しく観劇する、ギョル大統領（中央）。左は大統領夫人。右は国務大臣。

## アブドゥラー・ギョル大統領の来日

4日に来日したギョル大統領一行は、その日の夜に神奈川県川崎市で催されたトルコ共和国大統領来日記念イベントのひとつ、トルコ舞踊団「シャーマン」によるダンス公演を1500人の招待客とともに観劇。日本人客や在日トルコ人客から熱烈なる歓迎を受けた。

45名のシャーマン舞踊団のパフォーマンスは世界のトップレベル。2時間ほどの公演を堪能して退席する大統領を大きな拍手で見送った観客に用意されていたのは、サプライズ・プレゼント。天皇陛下に、献呈されるために邦訳された二冊の本が全ての招待客に配られた。「悲劇の軍艦 エルトゥールル号」と「テヘラン脱出―世紀の救出作戦―」。この二冊の著者はトルコ人作家エルダン・ギユベン氏で、非売品である。またこの大統領訪日直前には、両国の友好に尽力している「日本・トルコ協会」（1926年創設）の年次総会、講演会そしてレセプションが都内で催されている。同協会の名誉総裁、三笠宮殿下をお迎えし、名誉会長のセルメット・アタジャンル駐日トルコ共和国大使、協会会長の丹羽宇一郎伊藤忠商事（株）会長らが参列し、日本とトルコの関係者とともに大いに友好の輪を深めていた。トルコ大統領訪日と併せて、フォト・レポートする。（平早勉／写真家・串本大使）



トルコの「シャーマン舞踊団」は、作品『出会い』を上演。04年に結成されたグループは45名のアーティストで構成され、トルコ文化にとって重要なアナトリア地方で続いている伝統舞踊、民謡、衣装の特徴を表現。モダンダンス、アクロバットやフラメンコなどの多様なパフォーマンスを取り入れており、本公演はカラフルでリズムカルで、パワーあふれるステージ。お世辞抜きで素晴らしい公演で、万雷の拍手はしばし鳴りやまなかったほどだ。





# PHOTO SALON



公演終了後、サプライズ・プレゼントの本が入った赤い箱を抱えてハッピーな在日トルコの子どもたち。大統領と会えて興奮の余韻がさめない。



出迎えたアタジャンル駐日トルコ大使と握手を交わす、三笠宮殿下。



講演会でトルコの思い出を語る三笠宮殿下。



日本・トルコ協会の新会長に就任した丹羽宇一郎伊藤忠商事(株)会長は友好と発展を願うスピーチ。



日本との友好促進を熱心に訴えていたアタジャンル駐日トルコ大使。



会場入りする殿下は拍手で出迎える参加者に軽く会釈する。先導するのは、協会前会長の米倉功伊藤忠商事(株)名誉理事。



講演者のスピーチに耳を傾ける三笠宮殿下と妃殿下。



トルコ関係者、日本人外交官と熱心に話し込む三笠宮殿下。



レセプションでは日本とトルコの友好発展を願って、乾杯！殿下は大使とグラスを交わした。



## インターナショナル スクールに通う一人 の少女の生活と成長 を追う

平早勉写真集  
『7歳のプレリュード』  
発行・気天舎／発売・星雲社  
本体 1000 円＋税

### 平早 勉 (ひらはや・つとむ)

1948年千葉市生まれ。中央大学卒。サラリーマン生活を経て30歳の春以降、ヨーロッパ、アフリカ、北南米、中東、アジアをめぐる4年半の海外放浪。帰国後週刊読売の契約カメラマンののちフリーになる。ライフワークは子供の目線で撮る「世界の子供たち」現在渡航国は80ヶ国を数える。日本＝トルコ友好発祥の地、和歌山県串本町より「串本大使」を任命される。2008年4月に写真集『7歳のプレリュード』を刊行。

ネパール共産党毛沢東主義派マオイスト拠点

# ロルパ取材記

アジアプレス・インターナショナル

## 小倉清子

マガラート自治区人民政府議長

サントス・ブラ・マガル

との再会を求めて

マオイストの本拠地ロルパへ

西ネパールにあるロルパ郡はマオイストの「首都」といっていい土地である。マオイストは1996年2月に人民戦争を開始して以来、カトマンズの西約250キロのところにあるロルパとその北に接するルクム郡を、武装闘争の本拠地としてきた。本格的にマオイストの取材を始めてから、私の興味もつねにロルパに引きつけられていた。一〇回を超えるロルパへの取材で、私はネパールにロルパという土地がなかったら、この国に反政府武装勢力「マオイスト」が誕生することとはなかったにちがいないと確信していた。

これから記すのは、2004年9月半ばに行った三度目のロルパ行の話である。このときの取材の目的は、ロルパ出身のマオイストであるサントス・ブラ・マガルに再会することだった。サントスは、この年1月にネパール共産党毛沢東主義派が樹立を宣言したマガル族の自治区「マガラート自治区人民政府」の議長である。彼への接触は、ロルパに入ってから現地で行うことにした。接触まで何日かかるかわからないが、腰を据えて待つ覚悟でいた。

マオイストの本拠地ロルパへ

2004年9月20日、私はジープでゴラヒを出発、車で行ける最終地点であるロルパ郡南部のダハバンに向かった。未舗装の悪路を北へ4時間、車1台がようやく通れる道幅しかない山道をのろのろと進むあいだ、2、3台のローカルバスとすれちがった以外は見かけた車もない。

午後2時半、標高約1500メートルのところにあるダハバンに着いた。小さなバザールは霧に包まれて周囲が見通せない。茶店に入ると、早速、一人のマオイストに会った。警官や国軍の治安部隊もここまで来ることはほとんどなく、すでにマオイストの本拠地に入ったことを実感する。

赤土の松林を半時間も歩いて下ると、強い雨が降り出した。雨宿りをする民家も岩陰もないために、とにかく早足で山

を下るしかない。ところが、滑りやすい

赤土のために、急ごうとするとすぐに足がとられる。傘をさしても、雨をさえざるのは肩から上だけで、リュックはすくりにびしょ濡れになった。インドへ出稼ぎに行き、家に帰る途中だという数人の村人は、全員が大きな荷物を背負っていたが、身体をすっぽり覆う大きなビニールシートをかぶり、早足で降りていく。山を下ったところにある民家で雨宿りをしたために、ヌワガウン村に着いたときには、すでに暗くなりかかっていた。

村にある学校の教師の家が、この夜の宿となった。村人を通じて、マオイストとの接触を試みると、翌朝、バラート、という党名をもつ若いマオイストがやってきた。バラートは、ロルパを本拠とする人民解放軍第一旅団のメンバーだった。『ベニ襲撃』をはじめとする数多くの襲撃に参加したと言う。3ヶ月前にバ

### 小倉清子（おぐら・きよこ）

1957年栃木県生まれ。

81年東京大学卒業後、科学雑誌、月刊誌の編集者を経て、93年よりネパールに在住。ジャーナリストとして主にネパールの政治、社会問題を取材する。

主著に「王国を揺るがした60日」(亜紀書房)、共著に「匿されしアジア」(風媒社)などがある。



ロルバの特産物である大麻からとれる糸を織るマガルの女性

ンケ郡で、武装警察隊22人が死亡した待ち伏せ攻撃は彼一人で行ったのだと話した。道路に導線のついた地雷を仕掛け、丸2日間、治安部隊の車が通るのを待ったあと、スイッチを押したのだと言う。何気ない話し方から、彼が経験のあるゲリラであることがわかる。私がロルバに来た目的を話すと、バライトは「先に進んで、ある程度責任ある地位のマオイストと接触をしろ」と言った。

「イーグル」に接触しろ」

私はとりあえず、ガイリガウン村のテイラを目指すことにした。ヌワガウンを出て川沿いに東に向かい、2時間を超える登りのあと、テイラのバザールに着いた。ここでも、すぐにマオイストの方から会いにきた。今度は、バダム」という党名をもつ18歳のマオイストであ

る。マガル族のバダムは、隣村の学校に通う学生リーダーだった。若い年齢にもかかわらず、バダムは私がするたくさんの質問に、落ち着いて答えてくれた。

マオイストの党首「ブラチャング」は、9月1日に出した声明文のなかで、「ネパールの僻地にある、ある村」で、最近、党中央委員会の総会が開かれたことを明らかにした。ふとしたことから、私はこの総会がロルバで開かれたことを知った。実際にロルバに来てさまざまなマオイストに聞いてみると、誰も明確には言わないものの、総会がタバン村で開かれたらしいことが推測できた。普段はインド側に潜行している党首ブラチャングをはじめとする幹部を含めた、中央委員95人全員がこの総会に出席している。この中央委員会総会では、さまざまな重要な新決定がなされた。その詳細を聞くことも、今回の取材目的の一つだった。マオイストの党組織全体が地下に潜行している状態では、カトマンズではなかなか詳しい情報は伝わってこない。マオイストが支配する地域に実際に入って、彼らと直接話をす

ることが、詳細な情報を得る最良の方法であることは、これまでの取材で実感してきた。

テイラの小さな集落では朝から小雨が降っていた。これから登ることになっていく、背後にそびえる山の頂も、白い霧に覆われて見えない。私は雨があがるのを待ち、翌朝テイラを出た。出発間際に「バダム」から「ガルテイガウン村に着いたら、「イーグル」と接触しよう」と言われた。

集落を出るとすぐに登りが始まった。霧に包まれて周囲がまったく見通せない。しばらくは途中ですれ違う人もなく、見通しが悪いために正しい道を行っていないのか否か不安になる。1時間あまり、急な傾斜を一気に登ると標高約2200メートルの頂に出た。1時間ほど山を下ると、ようやく村落が見えてきた。そこはもうガルテイガウン村だったが、宿のあるバザールまでは山腹の道をさらに2時間歩かねばならなかった。

どの村でも、到着するとまず茶店に入る。甘い紅茶を飲みながら身体を休息させるのと同時に、村人と話しをするうちに、地元の情報を得ることが出来る。ガルテイガウン村のバザールに到着すると、一番手前にある茶店に入った。しばらくすると、茶店の前を若い男が通りかかった。店の主人が、この男を呼び入れて紹介してくれた。偶然にも、この男が「イーグル」だった。

イーグルは私をバザールの中心にある宿に案内した。バザールと言っても、20軒ほどの家が並ぶ小さな集落である。これでも、かつてはロルバで最も栄えたバザールの一つだったという。ネパールの山岳地帯では、旅人に食事を提供する家が「宿」で、料金も食事代しかとらない。私が泊まることになったのは、宿泊客用の部屋が3つもある大きな宿だった。家の裏庭にはめずらしく、トイレまである。バザールの中心には、こうした「宿」が数軒並んでいた。夜になってわかったことだが、ここは武装・非武装両方のマオイストたちの通り道になっており、大勢のマオイストがこのバザールで、毎日のように食事をしたり宿泊したりするのであった。

この夜も、私が泊まった宿に、6、7人のマオイストが宿泊していた。暗くなつてから到着した彼らは、ロルバの北に接するルクム郡から来たのだという。部屋と言っても、何枚かの板の仕切りがあるだけで、大きな隙間から隣の部屋の様子が見えである。一つの部屋には3つから4つのベッドがくっついて置いてあり、宿泊者はそこに雑魚寝をする。

私はグループのなかで最も年長者らしいマオイストと話を始めた。年長者とは言っても、小柄で30代後半にしか見えないう。ラジャン」という党名をもつこのマオイストは、格子のシャツを着て眼鏡を掛けた容姿や話し方から、元教師ではないかと推測された。実は、党首「ブラ

チャンダ」をはじめ、マオイストのリーダーには学校教師の経験者が多い。ロルパ出身のリーダーにいたっては、ほとんどが元教員である。教師がロルパを「コミュニティの土地」にしたといっても過言ではない。

「ラジャン」にマガラート自治区人民政府議長のサントス・ブラ・マガルに会いたいむねを伝えると、彼は答えた。

「リーダーは皆、ここから遠いところにいます。彼らに会える可能性は低い。このまま先に進んでも、徒労に終わる可能性が高い」

はつきりとは言わないが、「あきらめて帰れ」という意味にとれた。しかし、何日でも腰を据えて待つつもりで来た私は、このくらいのことであきらめるつもりは毛頭なかった。

「コミュニティ祭り」へ

ロルパに入って4日目、私はまだ、今回の取材目的であるサントス・ブラ・マガルへの接触ルートを探せずにいた。しかし、「協力者」はそれほど待たずに現れた。その日の午後、私が滞在するバザールに7、8人のグループがやってきた。このなかの一人で、「サンバト」という党名をもつマオイストが、「自分は通信機をもっているのです、それでリーダーと連絡を試みる。人を送ってでも連絡をする」と、心強い返答をくれたのだ。どうやら、リーダーの何人かは、それほど遠くではなく、ここから歩いて1、2



ガルティガウン村でマオイスト指導のもとで行進の訓練をする村人たち

日の距離にいらしなかった。

サンバトの言葉を信用して、私たちは待つことにした。待つあいだに、私は隣村で3日間開かれる「コミュニティ祭り」を見に行くことにした。マオイストが主催するこの祭りには、ガルティガウン村からも参加することになっており、バザールでは朝から伝統的な太鼓の鳴らす音に合わせて、マガル族の踊りを練習する子供たちの姿が見られた。

昼ごろになると、隣村に行くために老人や女性たちが集まりだした。ほとんどの人が3日間をコルチャバンで過ごすために、持参するトウモロコシなどの食糧

が入ったかばんをかついでいる。参加者の顔ぶれを見ると、年寄りが多い。ロルパの特産品である大麻の糸を巻き取りながら、出発を待つ60代の女性に、「祭りには行きたくて行くのですか」と聞くと、「お上(マオイストのこと)が厳しくてね」と、強制的に参加させられていることを示唆する答えが返ってきた。

午後3時すぎ、バザールの広場に60人ほどが列を作って、「行進」の訓練が始まった。全員が、マオイストが村人を武装化するために持っている「人民軍事キャンペーン」の参加者だ。2拍子の太鼓の音に合わせて、マオイストが「エク、

ドウイ(1、2)。エク、ドウイ。全員、コマンドーをよく見て！」と怒鳴る。単純な行進の練習だが、学校にも行ったことのない大人も多く、なかには同じ側の足と手が同時に出てしまい、なかなかうまく行進できない人もいる。

ガルティガウン村に着いて3日目の朝7時、私は「サンバト」、そしてサンバトの妻とともに隣村に向かった。サンバトの右腕は義手だった。警察詰め所を襲撃した際に、撃たれて切断したのだという。サンバトが小さなバッグを左肩から下げているだけであるのに対して、ル

ンギ」という長い腰巻姿の妻は、背中に重そうなりユックを担ぎ、さらにもう一つのバッグの紐を頭にかけて黙々と歩いていた。夫の分の荷物も彼女が運んでいるようだった。サンバトの後ろから山道を歩いていると、濃紺のジャンパーの下から、肩から紐で吊る下げた皮製の入れ物にピストルが入っているのが見えた。

サンバトはマオイストのロルパ郡事務局メンバーだった。妻も郡委員会メンバーである。二人とも20代だが、古参マオイストとあっていい。村に着くまでのあいだ、サンバトは人民戦争を開始した日にロルパ南部にあるホレリ警察詰め所を襲撃したエピソードなど、さまざまな話をした。マオイストの最初の襲撃を決行したのは、30人ほどのグループだったという。ほとんどが10代、20代の若者だった。

「当時、武器は狩猟用の自家製銃と「ガグリ・ボム」(水差しのなかに爆発物を入れた爆弾)しかなかった。ガグリ・ボムはうまく爆発しなかったんだ」

サンバトは8年以上前の話を楽しそうに語った。最初の襲撃では、「人を殺さない」という党方針にもとづいて、警官をしばって銃などを奪ったあと、全員を解放したのだという。彼は人民戦争が始まる前の経験についても語った。

「ちょうど10年前、リバン(郡庁所在地)の高校に在学しているとき、自宅を放火したかどで二回逮捕されて、拘留所に入られた。拘留所の中で試験を受けた

こともあった。二回とも私は無実で、ネパール会議派の支持者が自分で火をつけ、私に罪をなすりつけたんだ」

彼の話は1990年の民主化から人民戦争が始まる前の数年間、ここロルパ郡で起こった何千というケースの一つにすぎない。マオイストの支持者に対して、ネパール会議派の支持者は与党である強みを利用して多くの偽の訴訟を起こし、敵党の支持者を排除しようと試みた。その結果、大勢が逮捕され、逮捕を恐れた大勢の人が村を離れた。ロルパの人たちのあいだで、反国家感情が強くなった原因の一つが、与党によるこうした偽の訴訟にあったといっている。

「人民戦争は最後の段階に来ている」

私たちがコルチャバン村ハンニンに着いたのは、午前10時ごろだった。コミュニティニスト祭りの会場は、標高2000メートルほどの山の峰にある広場だった。広場の中央にはバレーボールコートが作られ、その周囲には周辺の村々から来た人たちがテントを張って、食堂や店を開いていた。

バレーボールコートで開会式が始まった。村には電気が通っていないために、ソーラー・システム（太陽電池）を使ってマイクで演説する。主賓の一人であるサンバトが演説を始めた。

「われわれの人民戦争は最後の段階に来ている。中央権力を占拠するために最後の闘いに入ろうとしている。私たちは

政府との対話に反対しているわけではない。政府側がネパール国民に完全な主権を与えることに同意するならば、われわれも対話の席に着くだろう。さもなければ、私たちは戦いを続けるだけだ」

首都カトマンズでは、和平交渉の再開に対する期待が日に日に強まるばかりだが、こうしてロルパでマオイストの話すことを聞いていると、対話解決の道はまだまだ遠いことを肌身で感じる。

開会式が終わると、参加している4つの村の学校対抗のバレーボールの試合が始まった。山岳民族であるマガル族の少年たちは、もともと運動神経がいいのだ

ろう。白いボールを追って、白熱したゲームが続く。ボールに共産党の赤い旗が立てられた野天のコートで練り広げられる試合を、各村から来た人たちは心から楽しんでいようだった。

コミュニティ祭りを訪れてみて、私は自分が非常に幸運であったことに気がついた。ロルパのマガル族はもともと、ネパール最大の祭りであるダサイン祭や満月の日などに、こうして村人が集まっては伝統的な踊りを踊って楽しんだ。祭りは彼らの文化継承の場でもあったわけだ。ところが、マオイストが人民戦争を始める、ロルパでは祭りが次第に減っ

ていき、数年前からはまったく開かれていなかった。

マオイストが一般の村人のために、こうした祭りを開くのは、ロルパでも初めてのことで、とだという。ロルパがマオイストの本拠地となった背景を考えると、この土地の先住民であるマガル族の歴史や文化は重要な意味をもつ。私は、彼らの伝統文化を、マオイストの支配下にある現在のロルパで、まさか目にするこ

とができるとは予測もしていなかった

ハンニンは、バレーボールの練習をする少年たちの声や、太鼓を打ち鳴らす音で活気に満ちていた。主催者はマオイ

ストだが、村人たちはこの「コミュニティ祭りを存分に楽しんでた。それにして、ここは郡庁所在地リバンから歩いてわずか数時間の距離にあるにもかかわらず、国」の存在がどこにも見えない。村の治安を守るはずの警察詰め所が、マオイストからの襲撃を恐れて次々に村を離れると、それに伴って銀行や役所も郡庁所在地に引き上げた。村々に残った「公務員」といえば、学校の教師と保健所のスタッフ、そして郵便局員くらいである。郡庁所在地リバンに駐屯する国軍や警察の治安部隊も、徒歩では年に数えるほどしかやってこない。しかし、今回、私がロルパにいるあいだ、毎日のように軍のヘリコプターが上空を飛んできた。祭り2日目の朝も、東のリバンのほうから飛んできた。ヘリコプターは会場の上空



ハンニンで開かれたコミュニティ祭り演説をするサンバト



コミュニティ祭りを見学してきたマガル族の女性たち

を2回巡回して戻っていった。何かオペレーション（作戦）が始まったのだろうか。

ヘリコプターが近づくのを見て、会場の村人たちの間に動揺が広まった。なかには慌てて逃げ出す人もいた。それを見てマオイストが「慌てるな、逃げるな」と叫ぶ。しかし、村人が怖がるのも無理はない。3月にあったベニ襲撃直後にも、人が集まっているという理由だけで爆弾を落とす、一般人8人が死亡した。政府側治安部隊は「掃討作戦」の名のもとに、ほとんど無差別に人を殺す。

マガル族の「戦いの踊り」

祭りの会場では、各村から来たグループがマガル族の伝統的な踊りである「サ



マガルの人たちの伝統的な楽器を鳴らす

ランゲ・ナーツ」を披露していた。太鼓の早いリズムに合わせて、飛び跳ねるようなステップを踏んだり、走り回ったりする。ステップを踏むたびに、腰の回りにつけた「ボンラ」と呼ばれる大きな鉄の鈴が鳴り、手に持った棒を前後の人がもつ棒と打ち合わせる。これを2時間も3時間も延々と続けるのである。かなりの運動量だ。踊りのあいだ、先頭に年長者の「アグワ（リーダー）」がいて、他の男たちは彼の動きを真似なければなら

ない。

60代から10代の男たちが混じったグループもあれば、子供たちだけのグループもある。

「サランゲ・ナーツは戦いの踊りでもあるんだ。私たちの人民戦争も、あの棒から始まったんだ」

踊りを見ながらサンバトが解説してく



コミュニスト祭りではサランゲ・ナーツを踊る「アグワ」

れた。

山岳民族であるロルパのマガル族は、理想的な兵士の素質をもつ。一度信じた考えは、めったなことでは転向しないと

牛の肉の塊がぶら下がっていた。ヒンドゥー教は聖なる動物とする牛を食することを禁じている。しかし、ここでは、村人は皆堂々と牛肉を食べていた。敬虔なヒンドゥー教徒が目にしたら、とんでもない光景と映るだろう。ある村人はこう話した。

「以前は、死んだ（殺したのではない）牛の肉だけ食べていたが、マオイストが来てから、殺した牛も食べるようになった」



マガルの人たちの伝統的なサランゲ・ナーツ

ヒンドゥー教が入る以前、ロルパのマガル族は牛を食べていた。ヒンドゥー教徒の国王がネパールを統治するようになり、牛を食べるのがタブー視されるようになってからは、崖から落ちるなどして



コミュニティ祭り、一番前で綱引きをする「イーグル」



コミュニティ祭りを警備するジャナ・ミリシアの少女たち

死んだ牛だけを食べたという。ロルパのマガル族が卑下され、官憲から抑圧されてきた理由の一つがこうした彼らの習慣にある。民主化以前のパンチャヤト時代には、牛を食べたという罪を着せられて投獄されたマガル族もいると聞く。マオイストが村を支配するようになり、彼らの古い習慣が再び戻った。

コミュニティ祭り三日目の午後、バレーボールの決勝戦が終わると、各村對抗の綱引きが始まった。マオイストも混じって、泥まみれのゲームが続く。夕方になると、下のほうから霧が立ち昇って来た。山頂があつというまに雲に包まれて見えなくなる。日も沈んだ午後6時すぎ、表彰式が始まった。踊りやゲームで優秀なチームに賞金が与えられる。最後に、新しく入党したマオイストが次々と名前を呼ばれて、サンバトの手から額に赤い粉がつけられた。表彰式が終わると、

他の村から来ていた村人たちは、太鼓を鳴らしながら帰っていった。

### ついに自治区の「首相」に会う

そもそも、今回私がロルパを訪れた最大の目的は、マガラート自治区人民政府の「首相」サントス・ブラ・マガルと会うことだった。しかし、コミュニティ

祭りからガルティガウン村に戻ると、政府側治安部隊がロルパ北西部に向かっているという情報が広まった。そのため、村からマオイストが一斉に消えてしまうというハプニングが起こり、私はサントスに会うのをあきらめて、郡庁所在地のリバンに行く決心をした。ロルパに入つて、すでに10日がたっていた。バザールでリバンに同行してくれる人を待っていると、午後になって、何人かのマオイストが現れた。

しばらくぶりに、見つけたマオイストに会ったのは、この日の夕方だった。すでに暗くなり始めたころ、バザールの茶店の軒先で、かまどで焼いてもらったトウモロコシをかじりながら、店の家族と話しをしていると、「チャタン」という党名をもつマオイストが一人で現れた。チャタンとはコミュニティ祭りですべて消えてしまった。あとで知ったのだが、私のリクエストを、直接、サントス・ブラ・マガルに伝えるためにロルパ北部に行ったのだった。

チャタンは私を見ると、「あなたが待っている人が、もうすぐ来ます」とだけ告げた。しばらくして、半ズボンをはいて、ラリグラスの花模様を編みこんだカバンを肩から提げたマガル族の男性が現れた。すでにあたりは暗くなっていたが、すぐにサントス・ブラ・マガルとわかった。

「あなたが私に会いに来たと聞いて、遠

くから歩いてきました」  
ずいぶん長時間歩いて来たらしいことは、火照ったような顔つきや少々疲れた表情からもわかった。いつも笑みを浮かべたような人懐こい顔つき、肩掛けカバンを持っただけの身軽な格好は、1年半前にルカム郡で会ったときとまったく変わらない。

「治安部隊が近くに来ていると聞いていたので、来られないかと思っていました」と私が話すと、サントスは「彼らはもう戻っていったから大丈夫」と答えた。

サントスが着いた直後、中年のマオイスト数人が私服の武装マオイストを何人か連れてバザールに来た。その中に政治局メンバーの一人もおり、全員が私が泊まっているのと同じ宿に泊まることになった。

この夜は、さすがに私も寝つかれなかった。何しろ、形ばかりの板壁の向こう側にマガラート自治区人民政府の「首相」と、政治局メンバーが泊まっているのである。寝つかれなかった主な理由は、ようやくサントス・ブラ・マガルに会えたことからくる興奮もあったが、それよりも、もし万が一、ここに治安部隊が来たらどうしようという不安だった。しかし、すべては杞憂にすぎなかった。翌早朝、まだ暗いうちに他のリーダーたちは南に向けてバザールを発った。午前中、サントス・ブラ・マガルは長いインタビューに応じてくれた。

自らの歴史を消されたマガル族

マオイストの人民戦争にロルパのマガル族が果たす役割はとても重要だ。マオイストが彼らの組織を全国に拡大し、国家の土台を揺るがす勢力にまでなれたのも、ロルパのマガル族が彼らの武装組織の中核として人民戦争を支えてきたからに他ならない。ロルパのマガル族がいなかったならば、マオイストはここまで勢力を拡大できなかったし、そもそも人民戦争を始める決断をすることもできなかっただろう。

多くのマオイストと話して感じるのは、彼らが持つ「国家」に対する嫌悪感、そして敵愾心である。それが、彼らがマオイストになる主な動機といってもいい。こうした感情のルーツが歴史のなかにあることを、サントス・ブラ・マガルはこう話した。

「ネパールにはもともとさまざまな民族が先住していたが、インドから来たインドアーリア系の人たちが来て乗っ取った。後者は前者を支配する過程で先住民族の言葉を廃して彼らの言葉であるネパール語に統一し、自分たちの宗教であるヒンドゥー教を押し付けた。この過程で、私たち先住民族はさまざまな権利を奪われ、それとともに私たちのなかに、支配者に対する敵愾心が染み込んだのである」

取材の過程でマガル族の歴史をたどるうちに、彼らがまぎれもなく「歴史の被害者」であることが見えてきた。まず、

彼らの歴史が見つからないのである。ネパール人が書いたさまざまな歴史の本を讀んでも、マガル族に関する記述はほとんどない。ネパールでは、歴史とは支配者の歴史なのである。

こうしたマガル族にマオイストが「自分たちは国家の被害者である」「国家は敵である」と教え込むことが、それほど困難なことではないことは容易に想像がつく。

サントス・ブラ・マガルは私とのインタビューのなかで、さらにもう一つ、興味深い要因を加えた。

「もともと狩猟をして生活していたマガル族は、コミュニティの団結力がとても強いのです。生きるのも死ぬのも一緒と、行動を共にするだけでなく、獲物は分けて食べるといって、共有の概念が社会に根づいていた。そのため、共産主義の思想が受け入れやすいのです」

サントス・ブラ・マガルはこの日、午後遅くまでガルティガウン村に留まり、夕方近く、北に向けて発つていった。翌日早朝、私は郵便局の職員とともに、郡庁所在地のリバンに向けて出発した。マリ川沿いの山道を歩いているあいだ、道沿いのジャングルに生い茂る雑草を指して職員が言った。

「この草は、マオバディ・ゾル（マオイストの根っこ）」と呼ばれているんだ。ちようど、マオイストが出てきたところから生い茂り出したのだけど、この草が生

えるところには他の草が生えないことから、そう呼ばれているのさ」

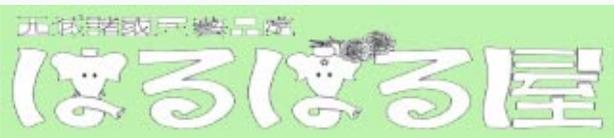
ロルパに入ってから、道端のどこにも生えているなど私も気づいていたのだが、マオイストが彼らの思想に反する人や他の政党の人間を村に住まわせないことを皮肉って、雑草に名をつけたところに一般の村人の真情がうかがえる。

かつては大勢の村人が行き来した、リバンに通じるマリ川沿いの山道は、ほとんど行き交う人もなかった。7時間後、リバンに着いた。バザールの周囲を有刺鉄線が囲んでいるのは、3年前に訪れたときと同じである。あちこちに迷彩服を着た国軍兵士の姿が目立つ。マオイストの襲撃を防ぐために張られた有刺鉄線

は、中央政府とマオイストの支配域の間であるかのようだった。

リュックを背負って、バザールを一人で歩いていると、警官に呼び止められ、郡警察署に「出頭」するよう言われた。リバンを訪れる外国人用に用意された登録用紙に記入すると、非公式の「尋問」が始まった。どこからどうというルートで来たのか、誰と会ったのか、などなど。もちろん、誰と会ったのかなど話せるものではない。今回の取材行の目的を果たした私には、リバンにとどまる理由はなかった。翌朝、日に2本しかないダン郡ゴラビ行きのバスに乗り、私はリバンを離れた。

インド・ネパール・アフガニスタン・バリなどなどから  
はるはるやってきた衣料品・織物・アクセサリー・  
楽器・CD・DVD、、、が皆様をお待ちしております



<http://www.harubaruya.com/>

180-0004 武蔵野市吉祥寺本町 1-8-3 コスモビル 2 階

Phone & Fax. 0422-21-4790

渋谷アムリタ Phone & Fax. 03-3461-6563

吉祥寺別館 Phone & Fax 0422-22-2433

☆はるはる屋通信☆

インド・バリからオリジナル春夏物衣料品  
タイの衣料品 バーゲン中でーす！！

9月6日(土)、7日の日比谷公園における  
"Nepal Day Festival 2008"に出店します

★ 軽井沢店は、7、8月は毎日営業です ★

ベリーダンス、インド舞踊のイベントに  
商品を持って参加いたします。ご連絡ください。

ネットでのお買物もお楽しみください！